

“感じる” ⇔ “表す” 学びの連鎖

～造形遊びからひろがる学び～

西井 恵美子

造形遊びの魅力は、子どもたちが材料や用具、場所や環境、友達とかかわりながら、子どもたち自身が意味や価値を見出し、学習活動をつくりだしていくところにある。

本稿では、子どもたちのエネルギーを受け止め、表現へと導く素材である、「木」を基にした造形遊びを展開した。多様な学びがひろがるよう、香りや質感、扱いやすさといった観点を持って、多くの木切れ、木片、木の皮などを集め、教室の一角に平積みし、学習時間以外にも手に取れる「木の空間」をつくりあげた。そのことによって和みや癒しの効果が生まれ、表現意欲が喚起され、十分な活動時間を保障することができた。そして、互いのまなざしを共有する場面として設定した、テーマを持った造形表現では、子どもたちは一体感を持ちながらも、個々の木とのかかわりや思いを活かし、自分らしい表現をつくりだす対話を繰り返して学びをひろげていった。子どもがもてる力を総合的に働かせ、新しい意味や価値が見出されるような魅力ある題材設定が重要であるとともに、指導と評価の一層の充実が課題である。

キーワード：造形遊び、感性、木、プロセス、対話

1. “感じる” ⇔ “表す” 学びの連鎖

1. 1. 子どものプロセスをみる

子どもたちは想像力を働かせ、美しい形や色の感じ、その組み合わせに気付き、思いに合った表し方を見つめながら造形活動に取り組んでいる。図画工作科の学習はつくりだすことそのものが目的であり、作品はその結果として表れるものといえる。造形活動において出来上がった「もの（作品）」より、そこに至るまでの「こと（プロセス）」が一層重要なのである。

子どもは感性を働かせて対象と向き合っ“感じ”，その“感じた”ものを“表そう”とし、また，“表した”ものから“感じ”，そこから思い浮かんだものをつけたしたりつくりかえたりしてまた“表し”…というような行きつ戻りつの関係(⇔)の中で、学びを連鎖させながら、つくりだす喜びを味わう。そして、色や形、イメージを直感的に構成していきながら、自分らしい表現をつくりだして行くのである。そんな子どものプロセスを重視し、細やかなみとりと支援を行いながら実践を進めてきた。

1. 2. 自分らしい表現をつくりだす「対話」

図画工作科において、感性を働かせて対象と向き合うこと、自己と対話することは欠かせない要素である。それらは自分の表現、造形活動の軸になる。そこに、友達(他者)との対話が絡み合うことは、自分らしい表現をつくるために大きな作用をする。「共に学ぶ」学習は、子どもの資質や能力が働き、伸びる機会のひとつであるといえる。友達の活動する様子を共感的に受け止めたり(共有化)、そこから新しいアイデアを思いつ

いたりしながら、自分の力を伸ばし高めていく。そんな「対話」が繰り返される学習をめざしてきた。

2. 造形遊びからひろがる学び

造形遊びの魅力は、子どもたちが材料や用具、場所や環境、友達とかかわりながら、子どもたち自身が意味や価値を見出し、学習活動をつくりだして行くところにある。意味や価値は教えられるものではなく、自分らしい意味や価値を見出せたときにこそ、実感できるものである。そんなとき、子どもの目は輝き、自らもつ思いや願いを楽しみながら実現させようと夢中になり、また、没頭して取り組んでいく。「自ら学び、自ら考え、よりよく問題を解決する」という「生きる力」を育む資質や能力は、そんな造形遊びの学習過程の中ではっきり表れている。

そこで、子どもたちのエネルギーを受け止め、表現へと導く素材であり、多様な学びが期待できる「木」を基にした造形遊びを実践し、子どもの表現のプロセスをみとり、支援しながら分析していく。

2. 1. 木の魅力とその空間

木の持つ魅力は素晴らしい。香りや手触り、木目等、木の持つよさは人の心をひきつけ、木に触れていると何か心の和むのを覚える。それは木が生きものであるからである。木材は人間の五感に作用し、木に囲まれた空間は、暖かみや安らぎ、心地よさを生み出すと言われている。そのような多くの魅力を持つ木が教室の一角にあるという空間そのものが和みや癒しの効果を生み、表現意欲を喚起し、学習の効果を生み出す。



[写真1:木の香りがひろがる空間・豊富な材料]

そして、木を基にし、多様な学びへのひろがりを生み出すことができるよう、「香り」や「質感」、「子どもたちが扱いやすい」といった観点を持って、できるだけ多くの木切れ、木片、木の皮などを集めることに力を注いだ [写真1]。

2. 2. テーマを持った造形表現

学習指導要領に「造形遊び」が設けられて30年を過ぎたが、その実践の頻度や定着度に様々な批判的議論も提起されている。しかし、私自身は先述2.のように肯定的にとらえている。

そこで、木に触れて、木から受け取る感じを大切にしながら思いのままに表現したり活動したりすることをねらいとする「造形遊び」の学習と、木で表現することをねらいとする「絵や立体、工作に表す」学習、それら両方をふくんだ題材を計画し、造形遊びからひろがる学びの可能性を探ることにした。

本題材は、木の魅力を味わうことを通して、「木に触れる・木で和む・木に挑む」という3段階の学習活動である [図1]。まず、子どもたちがじっくりと木に触れる経験を大切に、木に触れたときのしっとりとした感じ、木からあふれる香り、木と触れ合うことから浮かんでくるイメージ、そこから生まれる思いを十

分にみとる(木に触れる)。それは一人一人の内的な体験であり、個々の造形的課題が生まれる学びのプロセスである。そして、木の香りがあふれる学習空間で心安らいだり、自然材料特有のものを身体で鋭敏に感じたり、木の世界に浸ったりする(木で和む)ことを大切にしていく。そして、互いのまなざしを共有する場面として、テーマを持った木による造形表現(木で挑む『木でできタワー』)に取り組む。その中で、子どもたちが自分らしい表現をつくりだすために吟味したり、対象や自己、他者のとの対話を繰り返したりする姿を細やかにみとっていく。

3. 題材の実際

『木でできタワー』

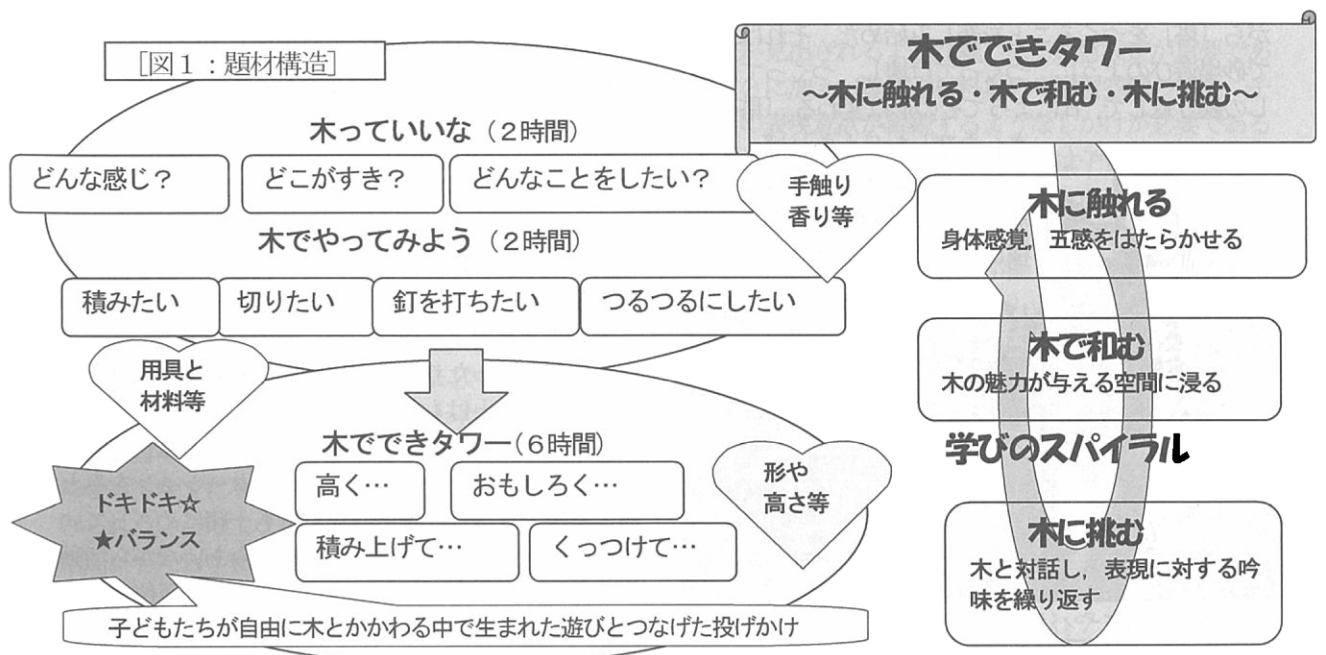
～木に触れる・木で和む・木で挑む～

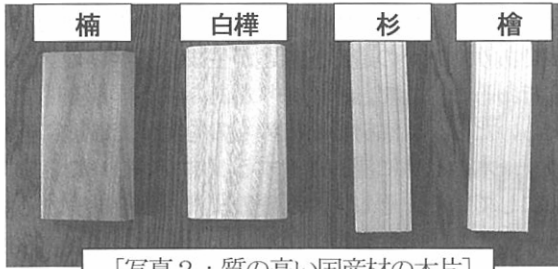
3. 1. 木との出会い、子どもの姿から

はじめに子どもたちが木に対して持っているイメージを探るため、「木」からイメージされることを自由に出し合ったところ、「木でできているもの」がたくさん挙げられた。そこから子どもたちは、「木」というと、身の回りにある木でつくられたもの(製品)というイメージ、意識が強いということがみとれた。

そこで、「木」自体に焦点を当て、感覚を研ぎ澄ませた出会いとなるよう、次のような活動へとつなげた。

材料集めからこだわった、香りのよい国産材の木片を子どもたちに手渡す [写真2]。すると、子どもたちからたくさんの反応が表れる。はじめに手にとって香りに気がつき、「木ってこんなににおいがちがうものなんやね」「においや表したい感じは同じような気がするの、表す物や言葉に違いがあるなあ」など、子どもたちは興奮気味に思いを伝え合う。「香りをじっくりとかぐ子」、「じい〜っと眺めながらさわってみる子」、「木から生まれる音や響きに気づく子」、そこから重さの違





[写真2：質の高い国産材の木片]

いを感じたり、木目を見つけたり、色身の違いを比べたり、それぞれに‘木’から自分の感覚が受け取るものを内的に変換していく [写真3]。

互いの感覚が言葉によって共有されることでまた確かなものとなる。それと同時に、イメージを生みだしたり、過去の経験とつなげたりしながら、言葉にする



ことで、対象や自己との対話をしながら他者との対話が深まっていた。

[写真3：感覚を研ぎ澄ませて木と出会う]

3. 2. 子どもたちの遊びと結びついたテーマ

教室内に木の空間ができてからというもの、子どもたちはどんな短い休憩時間でも木に触れて、自由に積んだり並べたり、何かをつくろうとしたりし始めた。そんな中、子どもたちの自然な遊びから生まれたのがドキドキするバランスを楽しむ、「塔づくり」である。初めは単に並べたりつないだり積んだりといった低学年の造形遊びでみられる行為であったのだが、しばらくするといろいろに積み上げたり組み合わせたりしながら「塔」をつくることを楽しみ始めた。それはまるで砂場遊びのように、つくっては壊し、つくっては壊しの繰り返りで、日によってその形は変わる。「塔の高さ」を楽しむ日もあれば、多くの柱がバランスよく立ってつながり合う「塔の集合」のような横広のものもあった [写真4]。



[写真4：高さやバランスを楽しんで遊ぶ子どもたち]

そこで、このような子どもたちから生まれた遊びを次時の動機づけに活かしていくことにした。

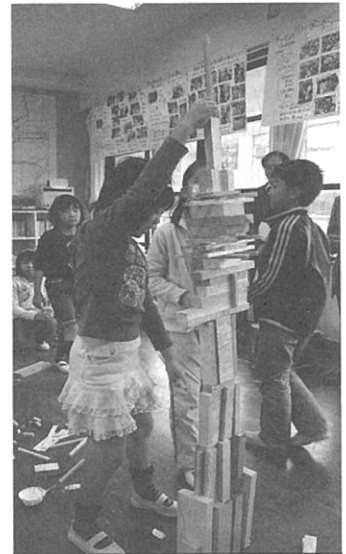
3. 3. 『木でできタワー』子どもたちの表現

前述の流れから、一部の子どもたちが休憩時間を楽しんでいる遊びとつなげる形で、バランスを楽しむ『木でできタワー』を表現することを投げかけた。子どもたちはそれぞれに自分の表したい「タワー」をすぐに考え始めた。「タワー」という言葉が持っている形や高さ、美しさなどのイメージに、「バランス」という言葉が加わることで、子どもたちにとってより意識しやすいテーマとなったようだ。どの子も使いたい木や作りかたなど、アイデアが次々に沸き、活動を進めて行った。

以下にいくつかの子どもたちの活動や造形表現を挙げる。

【高さに挑む姿】

「タワー」という言葉の持つイメージにある、「高さ」にイメージをふくらませたA児は、木片の長さや厚みに注意して材料を選び、また色味にも感覚を働かせながら、最後には自分の身長を越える高さにまで高く積み上げていった [写真5]。高く積み上げるほどにぐらぐらと揺れ、バランスが求められることから、土台部分をしっかりと安定させることや、下段と上段の積み重ね方の違いも生み出しながら、自分の表したいものに向かって、造形的な感覚や能力を発揮し、具現化していった。それは自己と対象との対話を繰り返し、活動に夢中になって学びを進めている姿であったといえる。

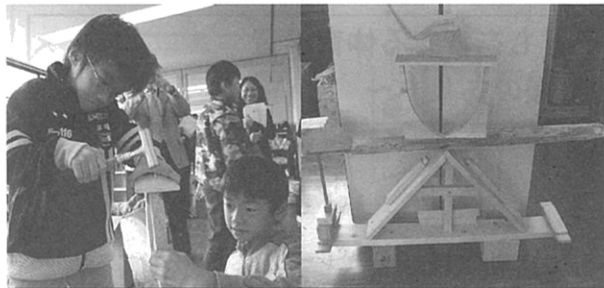


[写真5：高さに挑むA児]

【友達と一緒にひとつのタワーをめざす姿】

一人で表現するよりも大きなものをつくり上げようと、友達と一緒にひとつのタワーに取り組むペアが何組か生まれた。なかでも、複雑な形をイメージしてつくり始めたB児とC児は、互いの思いを言葉で伝え合って、釘を打ったり滑らかに磨いたりして一人ひとりが活動することはもちろん、B児がしようとする作業にC児が自然と手を添える場面が多くあった [写真6]。そこには、言葉を介さないコミュニケーションをみとることができた。言葉にしなくても一緒にめざしているものに向かって、互いの意図を汲みあいながら活動する様子は、まさに対象、自己、他者との三位一体の対話が繰り返されている姿、学びの連鎖が起こっている

る姿であったといえる。



【写真6：互いに思いをくみ取り合うB児とC児】

【友達と影響し合いながらつくる姿】

仲良しの友達と一緒につくる楽しさを感じながら、活動するペアも何組か生まれた。しかしD児とE児は、ペアで活動していても二人でひとつのタワーをつくるのではなく、互いにつくりたいタワーへのイメージをしっかりと持ちながら自分の表現を大切に、場を共にしているという様子であった。そして、必要な時にはアドバイスし合ったり手助けし合ったりして、表現を温め合い、お互いに影響しあいながら自分らしい表現を探っていく姿がみとれた【写真7】。それは対象、自己との対話を中心としながらも、他者との対話である、大切な友達からのよい影響を取り入れながら取り組む姿である。このように、自分のイメージをもとにしながらか、他の影響をよりよく受け入れることで新たな価値や意味を見出すこともある。



【写真7：影響し合いながら繊細な作品をつくるD児とE児】

4. 題材の考察

4. 1. 木とその空間が与える学び

木に出会い、木の空間が教室に出来上がったことで、子どもたちに様々な変容があった。3. 2. で述べたように、休憩時間に木とかかわることを好み、わずかな時間であっても思いついたことを試したり、なにかをつくらうとしたりして、子どもたちの表現意欲や造形的な関心が絶え間なく働いていた。また、木の香りは、教室に入るとすぐ感じられるほどで、子どもたちは「木におい、大好き」「教室に入ったらホッとする」などと言って、何気なく木の香りをかいだり、木を手にとりてなでたりして心を落ち着かせている姿が多くみられた。このような子どもたちの姿から、木とその空間がもたらす和みや癒しの効果や、表現意欲の喚起が確信できた。

また、木と出会うと同時に、木で表現するのに必要

な用具の使い方を学習したことは子どもたちの活動意欲をさらに掻き立てた。鋸や玄翁、釘、紙やすりといった用具を使うことそのものに魅力があり、「切ること」「釘を打つこと」「磨くこと」に夢中になった。そして、用具を使う中で自然な助け合い、教え合いも生まれた【写真8】。自分が表現したいイメージを持ち、アプローチすることによって素材の姿が変わる喜びを感じながら進める姿は、単なる用具体験とは一線を画す。また、用具の使い方の上達も早かった。それは、常にたくさんの木が身近にあり、必要な用具も自由に使える空間が子どもたちの学びを深めたのである。



【写真8：自然と生まれる助け合いや教え合い】

4. 2. 造形表現のテーマ設定

一人ひとりが自分らしい表現をつくりだすことが図画工作科の目標であるが、互いのまなざしを共有するために、『木でできタワー』というテーマで造形表現に取り組んだことで、個々の木とのかかわりを活かしながらも、一体感の内に感覚や思いのひろがり生まれた。そして「タワー」という強い象徴性を持つ言葉は、形や高さ、美しさ、バランスなどの造形的な表現への方向性を与えてくれた。やはりテーマの厳選が大きな鍵となる。

5. 成果と課題

子どもがもてる力を総合的に働かせ、新しい意味や価値が見出されるような魅力ある題材設定が重要であることに加え、豊富な材料集めや学習空間の工夫、子どもの表現意欲が継続するようなしかけが必要であることがわかった。木がもつ魅力には子どもたちの学びをひろげる多くの要素があることもはっきりとした。

また、「造形遊び」は、子どもたちのすべての活動プロセスにおいて資質や能力が働くことから、指導と評価の一層の充実が課題であるといえる。評価規準をはっきりさせ、具体的な子どもの姿を示しながら、みとりと支援を積み重ねていくことが重要である。今後も「造形遊び」からひろがる学びを研究していきたい。

参考文献

- ・林耕史 (2009) 『「プロセス」は見ることができるのか』(美育文化協会・美育文化V0, 59)
- ・板良敏 (2002) 『「造形あそび」という名の学び』(美育文化協会・美育文化V0, 52)
- ・文部科学省 (2002) 『初等教育資料NO. 75』